

質的研究のためのKJ法の科学性に関する研究Ⅲ

——「志」と現象学の本質直観を中心に——

青 木 秀 雄

アブストラクト

科学が現象についての納得できる理論（構造）を把握する営みだとすれば、客観的真理の把握は原理的に不可能だとしても、その認識の客観的妥当性の成立条件として、現実をありありと認識可能にする「明証性」は特に重要である。現象学的還元によって、形相の意味本質を捉える「本質直観の学」は、意識に与えられた事象を「ありのままに」観て取り記述する、とフッサールは規定した。他方川喜田は、KJ法は「データ群が内在させている論理を顕在化させる発見の行為である」として「おのれを空しくして、データの語りかけに最も自然に従ってまとめる」とした。

小論では、質的研究としてのKJ法における科学性に関し、特に現象の「明証性」を担保するための方法論を中心に論証した。現象学では本質直観における内在知覚の現実性にそれを求め、KJ法では表札づくりにおける「データをして語らしめる」という志の原則を中心に、ボトムアップの検証システムによって現象との整合性を担保していることを明らかにした。技術は暗黙知を当然伴うため、明示的記述には限界があるが、両者の思想と方法論の類似性及び科学性の一端を検証した。

キーワード

科学性 KJ法 現象学 本質直観 明証性

はじめに

質的研究は、場に生きる人々にとっての事象や行為の意味を把握し、そのローカルな状況を具体的に解釈し、構成していくこと（meaning-making）を目指す。当事者視点での自然な理解、時間や歴史性、空間的な文脈の具体性、固有で特殊な中での意味解釈に重きを置く。¹川喜田は、個性把握的・定性的・総合的の三者が有機的に結びついた科学的方法論及び技術としてKJ法を提示し、法則追求的・定量的・分析的研究とこれとが、あたかも車の両輪のように揃ったとき、初めて健全な科学の道になると訴えた。このことから、KJ

法による彼の質的研究重視の視点が窺える。²

それはまた、現象学に「深い共感を覚え」具体的技術として生み出された。「私はデカルト流の『世界外的な』科学ないし自然科学のパラダイムに見切りをつけていた。それをのりこえるものとして、フッサール、ハイデガー以下メルロ・ポンティに至る現象学的哲学の『世界的』思索に深い共感を覚えていたのである」。しかし、「具体的に手の下し方を明示できるノウハウがない限り、思想・哲学ばかり説いているのでは、世界外的科学者にバカにされるばかりである」。だから、「思想から技術の末までをけって分断せず、野外科学やKJ法を訴えたわけも、そこにあった」。³

現象学の基本は、現象学的還元によって超越論的立場に身を置き、事実、実在物そのものとしてではなく、形相、理念、概念の意味本質として捉えることを意味する。⁴その根本は、ハイデガーもいうように、本質が人間の生の経験の中に必ず存在する、という点にある。本質を取り出すとは、コトバで人々が了解しているもっとも「核心的な共通項を括り出す」ということを意味する。⁵これは結局構造であり、KJ法の志に近いものであることを小論で明らかにしたい。

フッサール認識論とソシュール言語学に主に基づき、「すべての科学理論は、構造によって現象をコードするという構図に」なっている、と池田はいう。つまり、「何らかの不変の同一性によって、変なるもの」を「本質観取」し、関連づけて記号変換し構造化する。だが、「現象の原因が外部世界にのみ自存するとの錯誤により、構造もまた外部世界に実存すると錯誤」される。⁶しかし、現象学的還元は、実在物があるという常識を破綻させた。なぜなら、時間を内包しない外部世界の不変の実在物の存在を確かめるには、実際に経験できる現象に頼るほかはない。しかし、時間を内包しないものを実際に確かめようがない。しかも時間自体、我々（主体）を離れて外部世界に自存せず、意識内部の形式と見做せる。⁷

KJ法ではミニKJ法と呼ぶ技法で本質（志）を取り出し、表札という一文に統合する。すると、元ラベル（データ）の段階では見えなかった「新しい概念とかアイデアが、多少なりとも生れ落ちている。しかし、こうして生まれる飛躍には、そのラベルのセットによって、さまざまの度合いがある」。稀には、驚くべき飛躍の起こることもある。⁸そこで、志の統合が、「本質観取」による抽象（超越）であることも明らかにしたい。以上の記述により、KJ法が本質直観（本質観取、形相的還元）する学としての現象学と親和的であることが垣間見えよう。

川喜田はその豊富な経験から、次のように科学的条件を提案した。「真に科学的といえるやり方は、次の最少の条件に限るのがよい。①獲得した手段・方法をガラス張りにした材料（データ）の提示、②そのデータの加工処理方法がガラス張りであること、③結論が明示されること」である。⁹『発想法』（1967）において、野外科学の方法論としてKJ法を発表して以来、主に質的（定性的）研究法として発展してきた。ところが、その科学性は、必ずしも周知に至ってはいない。近年、KJ法研究が盛んになるにつれ、その科学性研究も進められてはいる。¹⁰

「客観」は原理的に証明できなくとも、科学が現象について納得できる理論（構造）を把握するための絶え間ない営みであるとすれば、科学的手法により見出された構造は相当程度の共通性（普遍性）へと収斂され、その軌跡は明白に提示されるべきであると考えられる。そこで、拙論「質的研究のためのKJ法の科学性に関する研究ⅠとⅡ」において、KJ法の

結論部「相関関係の配置図」構造の近似的妥当性を考察することにより、その科学性の一端を明らかにした。しかしながら、KJ法図解の生成プロセスと「本質直観」(本質観取)のそれとの比較研究により、その科学性を検証した研究は管見にして未だ知らない。¹¹

認識の普遍性の根拠の解明を目指したフッサールによれば、ある対象が確かに存在するという「妥当性」は、現象学的前提から、どこまでも「主観的」な妥当性でしかない。よって、客観性(正しさ)という概念は、現象学では認識の妥当性と言い換えられ、認識の「現実性」とその「広範性」という二つのレベルをもつ。¹²そこで小論では、KJ法と現象学における認識の客観的妥当性の成立条件に深く関わる「志」と「本質直観」を中心にその科学性を論証する。

まず、現象学とKJ法の思想と研究方略について比較検討する。次に、現象学における認識の本質概念とKJ法のそれとを対比し、それらを支える「明証性」の観点から、拙論「研究Ⅰ」で用いたサンプルのKJ法図解結論部構造の生成プロセスと、ハイデッガーの『存在と時間』(1927年)における現象学的探究方法を比較考察することによりその科学性の一端を明らかにしたい。

I 現象学とKJ法の思想とその研究方略

(1) 基盤と研究方略

フッサールの『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(1836年)によれば、心身二元論が成立した理由は以下である。自然科学が、自然を均質で計量可能な、物理的因果関係の網の目と見なすや否や、そこから霊的なものの一切が追い払われ、心的と物理的世界とに明瞭に分割された。その発想は心的世界にまで転移され、自然と心の秩序関係を因果関係として、人間と世界との関係を実証する学の基礎が据えられた。¹³やがて19世紀後半に至り、その学の理念が危機に陥った。例えば、国家的、社会的価値が人間の価値を規定し、倫理・道徳的価値が人間存在の意味を規定するような様々な倒錯が、世界観やイデオロギー等の形で人文科学の土壌から現われた。しかも、それから20世紀にかけて、諸学は相対主義、懐疑主義、不可知論を蔓延するに任せた。¹⁴

この危機に際してフッサールは、次の二つの課題解決の必要性を痛感した。一つは、近代の理性がこの倒錯の道を辿った必然を解明し、その意味と動機を明確にする。もう一つは、理性がその本性に適うような仕方で使用されるべき対象は何かと問うこと。¹⁵まず、前者の根本原因は、「主観-客観」構図(スキーマ)を前提としたことにあると考えた。近代哲学では、デカルト、ロック、ヒューム、バークレーのイギリス経験論、スピノザ、ライプニッツ、カントなどの系譜は、「主観/客観の一致」の可能性を最大の難問として探究し続けた。しかし、どんな客観認識も論理上「主観」であるという「主観性の謎」の意味は閑却視されたままであった。¹⁶

後者に対しては、理性という概念を、現実を成立させる全体としての主観性のシステムと見做した。「原理的に言って、論理的な領域、つまり言表の領域においては、……『真に存在する』もしくは『現実中存在する』ということと、『理性的に証示されうるものである』ということは相関関係にある」と。「理性的に証示」とは、ある定立的意識(信念)を、それに内的に対応する直観的経験によって顕在的に充実化することである。「現実

を成立させる」とは、正しさや間違いなどはみな、知覚経験を含めた主観の働き全体のうちで観取され、その全体のうちに具体的意味が見出されるべきであるとした。¹⁷

KJ法は、現象学の思想と「結果的に」近いものがある、と川喜田は指摘した。没価値的な科学の独立王国を夢見ている人は、人間や社会の中で「認識」という活動だけを切り離し、世界の外から見るかのような「世界的」に身を置いている。「この点でKJ法思想は、西欧の近代哲学の中では、フッサールに始まる『現象学的』といわれる流れと、結果的に接近しているのだろう」。KJ法の「根底には、本質的に矛盾葛藤を含んだ創造的行為の本質がある」。だから、それは「『科学』の現代の概念体系を根本から再編しようとしているのだ」。その上で、「その思想から技術の末まで」一貫した野外科学とKJ法を打ち立てようとしたのであった。¹⁸ハイデガーの「世界内存在」とは、人間存在は、常に既に自分を世界の内に生きているという形で生を経験する、という視座であるが、¹⁹川喜田もまた、「『生きる』とは、何よりもまず認識というだけの狭さを乗り越えた実践の問題である」とした。²⁰

(2) 「内在—超越」構図と真理

「主観性の謎」について、カントの「物自体」のように、その記述は人間にとっての現象をコード（記号変換）したものであって、事物それ自体の明示ではない。したがって、自然科学の認識の客観性とは、現象について人間間の説明の共有性に過ぎず、「主観—客観の一致」を意味しない。そこで、神秘的直観や相対主義等の枠組みを破ったのはカントとニーチェであった。しかし、カントは「主観—客観」構図を残し、ニーチェはカオスと解釈の二項を置き、²¹世界は生き物の身体—欲望に相関的分節性として見出し「生成」という「力相関性」(遠近法) 構図を提示したが、「認識問題の謎」を完全に解明するには、フッサール現象学を俟たざるを得なかった。²²

ア・プリオリにその存在を疑えないものとして、デカルトが示した私、私の観念（コトバ）と体験（現象）だけから科学を構築できる、とフッサールは考えた。²³そこで、現象学的還元による「内在—超越」構図を提示し、一切の認識は内在意識のうちで構成された確信（超越）であるとした。²⁴「この机がいまここにある」という経験は、意識に「原的に」与えられている「いまここにある知覚」(クオリア) とぴったりは重ならない。よって事物存在は、構成された経験であって、知覚を超越したものである。オリジナルな体験を「内在」と呼び、構成された事象経験を「超越」と呼んだ。つまり、個々の原的な「知覚直観」が、意識の志向的統一によって「一つの机」という経験へ構成され、「存在する」という具体的な経験の確信（現実感）となる。²⁵

だからといって、「超越」が必ずしも現実であるとは限らない。自我は無意識、身体、言葉等によって構成されていると一般的にいわれる。しかしこれは、現象学の前提からは背理である。自我という極、意識が常に疑いを発し、そのつど「内在」に向けて様々な超越項を験す能力それ自体が、身体、無意識、社会や他人という超越項へと還元されている。ところが、自我（内在）は「はたらき」自体だから、原理的にどこにも還元することはできない。現象学的な自我とは、あらゆる超越項を還元し、またそれらを確かめ規定する根拠それ自体である。²⁶

(3) 真理と実存

フッサールは、実証科学のもつ「絶えず、無際限に真理に近づく」という信仰を取り払う必要があると考えた。科学的な知は、人間の実践的欲求が求める問題に応じてだけ、因果の系列（公理・法則・構造）として求められる。よって、仮説としてのそれらから、生活世界が規定されるのは論理的倒錯である。²⁷人間は仮説によって見えない世界（社会）を生き、逆にその実践的な生への欲望によって仮説（超越）を験し、世界を絶えず作り変えていく。科学の仮説は、どれほど精緻に積み上げられようと、決して客観的、超越的真理には至らない。²⁸

川喜田も次のように指摘している。法則追求のみを科学的と盲信する人びとは、独自（個性）の意味がわからず、それを普遍に対する単なる特殊と混同している。つまり、法則の現れとしての一事例と、独自とは全く異なる。²⁹KJ法のまとめ方は、「仮説の発生以前の段階であり、データをして語らせて仮説を発想するステップである。昔アリストテレスが演繹法や帰納法と共に提案した三つの方法のひとつで、哲学者パース（Charles Sanders Peirce）の名づけたアブダクション（abduction）である。日本語に訳するなら『発想法』とでも呼ぶべきだろうということになった。」³⁰野外科学は、仮説の構成を主眼とする意味で仮説発想的である。「野外」とは、実験室的ではないという意味で、歴史学者の古文書、生物学者の顕微鏡下の世界も野外として扱われることもある。³¹勿論、実存の内面も「野外」となり得る。

そこで彼は、科学に絶対的真理などないという。同じデータのセットでも、「人によって様々なKJ法図解になる。それにもかかわらず、まともに仕上がった作品なら、そのどれもが関係者を強く納得させる。真理なら一義的に同じ姿になるはずだ、と信じこみがちな俗流科学観の持ち主に、これでよいのだと判ってもらうには、しばしば骨を折る」。³²以上のように、「生活世界」を豊かにするための科学は、「人間の実践的欲求が求める問題」に応じて「仮説発想的」であるべきであり、究極的な真理などない、という両者共通の科学思想と研究方略が窺える。

II 現象学における認識の「本質」概念とKJ法

(1) 事実と本質

フッサールは、事実と本質を次のように区別した。³³

或る個的对象は、ただ単に一般に、一つの個的对象、一つのここにあるこのもの！一つの一回かぎりの対象であるだけではなくて、それは、「それ自身において」これこれの性状においてある対象として、その特性を持ち、本質的な述語要素をそれなりに貯蔵させているものである。〈中略〉例えば、どんな音もみな、それ自体として、或る本質を持ち、そしてその最上位に、音一般もしくはむしろ聴覚的なもの一般という普遍的な本質を持つのである。

「本質」とは、その個的存在の偶然性に含まれている必然性の側面である。したがって、経験認識を超え、理性により本質として観取されたどのような「個的直観」も「本質直観」

へと転化できる。即ち、コトバに置き直せる。しかし、言い尽せない事実（体験）も様々ある。また本質直観は、個的直観なしに想起や記憶のうちだけでも成立する。さらに、本質直観もまた個的直観と並んで「原的な直観」である。³⁴

知覚においての定立は「現出によって『動機づけられて』いるのであり」、しかも「単に一般に動機づけられているのではなくて、むしろ『理性的に動機づけられて』いる。それゆえ洞察、いやおよそ一般に明証とはあるまったく卓越した出来事なのである。その『核』からすれば、それは理性定立とその理性定立を本質的に動機づけるものとの統一なのである」。知覚において何かが顕在的（有体的）に与えられるとき、そのものの存在を定立するということは、我々の恣意に委ねられた事柄ではなく、むしろ本質的な事柄である。³⁵つまり本質直観は、恣意的な想像物ではなく、むしろ「感性的知覚作用」の仲間である。よって、個的経験の明証性の基礎として、知覚直観と本質直観は意識の自由にならない。例えば、 $2 \times 2 = 4$ という「理念的なもの」を納得した瞬間から、 $2 \times 2 = 5$ は妥当されず、それは彼にとって確かな存在者となる。物の知覚と物の意味は、実在物と抽象的なものという分類では捉えられない。物は実在物だが、理念（本質）は単なる心的抽象物と考えてしまう理由は、「主観—客観」構図によって、客観物の世界が在ることを前提にしているからである。³⁶

ある言葉の意味（本質）は、事実同様に人間にとって存在する。例えば、社会とは何かと問う。「システムだ」という人と、「神によって作られたものだ」という人は、コトバから受けとる当人の関心事、エロス価値を全く異にし、それぞれの仮説（超越）の主張を支えている。しかし、彼らは「社会」を全く違った意味（概念）として考えている訳ではない。なぜなら我々は、言葉を初めからもっていたのでなく、必ず「問主観」的な了解の構造を通してそれを做い覚えたからである。³⁷つまり、「他我」(他人)が主観(私)と同じ主観をもつ人間として存在し、彼も私と同一の世界の存在を確信しているはずだ、という確信構造に基づいてコトバが存在するからである。³⁸その根底に、ミラーニューロンのはたらしが考えられよう。

結局本質とは、具体的個物になっていない普遍的な可能存在であり、超時間的、抽象的なもの（超越）である。³⁹個的直観は、自分自身にとって明瞭なものだから、本質直観で言い当てられれば、即ち時間を含んだ一回限りの現象から、主としてコトバによって不変の同一性（本質、ソシュールのシニフィエ）を引き出すことができれば、コトバを通して人々の経験（現象）は共通了解可能なものになる。そこでこの構図に、外部世界は実在するに違いない、という信憑が心にとりつけば、外部世界は誰にとっても同じ「客観」という確信が生まれてしまう、とフッサールは考えた。⁴⁰

「KJ法の思想では」この共通了解を次のように表現している。「幾枚ものラベルの志が集まって表札という志を持ったひとつの全体が生まれることも、いろいろの人たちが集まって活性化されたチームが生まれおちることも、本質的には同じことなのである。KJ法の思想では、これは単なる譬え話でなく、本質においては同じ原理が貫いたプロセスである」。例えば、ある課題の合意形成のために、その関係者にラベルを配り、各自の意見を書いてもらう。それらデータをKJ法で統合すれば、できあがった図解は実際に生身の人間が訴える心の声の統合である。⁴¹

私と他人とは同一性を「知覚直観」しているという不可避性が、人間世界に共通了解性

を生じさせ、言葉一般を可能にしていることの土台は、⁴²人間があらかじめ言葉によって世界を分節しているからである。更に根本的には、「意味」は、世界とその諸対象が、情動—衝迫、目的指標、企投、当為の順序性等の連関の了解可能性として、つまり企投相関的な対象ノエマとして定位される。そこで、人間世界の他者関係においても、同様の構造的な本質連関が成立するからである。⁴³

ニーチェの「力」概念に対し、フッサールの構想は、「エロス論的」「欲望論的」な視点が脱落し、認識論的な概念で押し通されている。前者の概念体系は「力」「欲求」「意志」「価値評価」「肉体」等であるが、後者のそれは「意識」「表象」「反省」「知覚」「意味」「指向性」等の「意識相関性」構図（スキーマ）である。そこでハイデガーは、その視線を考慮して「気遣い」(Sorge) を実存の根源に据えた。⁴⁴フッサールの構図は、対象の「一般意味」構造の本質洞察であり、「気遣い相関性」構図は対象の実存論的、意味—価値論的構成の本質洞察である。両者の動機は異なるが、「現前意識」に定位する本質観取という点で等しい。⁴⁵さらにメルロー＝ポンティは、身体を志向する現前意識の領域を「現象野」呼び、「身体」を、世界を対象化し客体化する実存の中心、つまり世界を相関的に分節するそれとして、「意識」「主観」「自我」ではなく、「人間的な身体」を定位させた。⁴⁶

KJ法も同様に、主客分離以前の、もっと根源的な渾沌を問うところから始まる。そこにまず発動してくるのは、「渾沌」そのものの状況から生まれでた「関心」という欲求である。ここにフィールドワークという取材活動が始まる。「自分の心の中にあるものか外にあるものかさえ、本来は何も区別されているわけではない。そういう全体世界から、私たちはその関心を中心に据え、その注目点を中心に、あえて一部分を切り取る。そうしてその意味を圧縮して一枚のラベルに記入する。これが定性的なひとつのデータである」。⁴⁷「その注目点」を、KJ法では志と呼ぶ。現象学同様KJ法も、恣意的な理念ではなく、現象に対応した「知覚直観」としての「感性的知覚作用」、つまりエビデンスに基づいて意味本質を洞察することの重要性を指摘している。

(2) 事実と「明証性」

事実を知ることにはできない、と川喜田はいう。知ることができるのは、「①データと、それを獲得するに至った②方法手段だけ」であるとして、次のように付け加えた。一般的に、誤りが入り得るのは、観察の方法手段だけではない。記録するとき、誤りが入り得る。さらに複雑な物事の描写は、努力しても表現の不正確さや簡略化を免れない。「極端にいえば、すべてのデータはうそである。だから、『事実を知っている』などという傲慢な心を、まず捨て去るのがよい。この謙虚さこそ、科学的というにふさわしい態度というべきだろう」。⁴⁸

自分が常に関心から物事を疑い、またそれから常に疑いを確かめられる「生活世界」、その現実感によって人は夢と現実を区別している。客観的認識と我々が見做す対象は、それゆえ全て根本的に欲望—関心相関的な意味（価値）の秩序についての了解という認識の本質構造である。⁴⁹「明証性」とは、人間がありありとした生の経験（クオリア）の中で、物事に対して「これはそうだ」とか「これは本当だ」という確信的な心情、現実性をもつこと条件である。それゆえ、その遡行の突き当たりとしての「明証性」こそ、原理的に人間の懐疑の能力と動機の限界である、とフッサールはいう。明証性とは、現実それ自体の根

拠であって、真実の根拠ではない。現象学は「絶対的真理」を求める学だという誤解は、この明証性や妥当といった概念に対する無理解から生じた。⁵⁰

結局現象学は、客観性（正しさ）という概念を認識の妥当性と言い換えた。それは認識の現実性（リアルさ＝強度）と普遍的な広範性（広く共有される）である。つまり、ある対象が確かに存在するという認識の妥当性は、どこまでも主観的な妥当性でしかない。しかし、この認識の確信は、多くの他者（主観）がいつも既に私（主観）の中に匿名的に協働すれば、「相互（間）主観」的となる。⁵¹即ち、主観の確信構成の学としてのフッサール現象学は、不可疑的な間主観的確信をそのうちに含むとき、その客観性を得て客観的（普遍的）認識として妥当するとした。⁵²だが、それは共同の主観の共通認識に過ぎない、という相対主義的構図とどう違うのか。現象学は、認識の絶対的「正しさ」（主客一致の確証）を前提としないことから、あらゆる認識は決して確信を超えない。真実か虚偽かではなく、妥当性の確度（普遍性）が問題となる。⁵³認識の「現実性」の強度により「妥当性」の確度が高まり、「広範性」はそれを強化する。

Ⅲ 現象学の本質概念と KJ 法の志

(1) 「本質直観」の方法

明証性を担保する科学的方法論とは何か。ハイデガーは『存在と時間』（1927年）の劈頭「緒論—探究の現象学的方法」において、現象学を現象（ファイノメノン）と学（ロゴス）に二分し、ギリシャ語源から分析した。前者の動詞は「白日のもとに曝す」というファイの中動態であって、現象の本義は「自身をば、自身以外のものによって仮象することなく、自身に即し、在るまま、みずから示現する者」である。だが、それには仮象という意味が付きまとうので、この両義を常に見取することが重要となる。後者は多義であるが、その根本は「語り」即ち「語りつつある物のために、当のものを見せる（中動態）」ことであるという。したがって、「自己を示現する者をば、その者がその者自身の方から自己を示現するとおりに、その者自身から見せる」ということになる。⁵⁴これを可能にするのは、実存の本質（根源）として常に既にある「気遣い」のはたらき、即ち「意味を問う」ことであるという。⁵⁵

先入見を排除し「その者自身から見せる」ようにするために、KJ法の「本質追求をも含めた広い意味の状況把握で最も大切なことは、データをして語らしめる」ことである。即ち、既存概念や希望的観測等に従うのではなく、「おのれを空しくして、データの語りかけに最も自然に従ってまとめるのでなければならない」。⁵⁶しかし、一般的にはアテハメ論が多い、と川喜田はいう。理念等をもって論理づけるという固定観念である。これは「分類と理屈という形で現われる。このとき人はまずデータをなんらかのカテゴリーで分類しようとする」。⁵⁷即ち、トップダウンの誘惑に陥る。

フッサールによれば、普通の学は憶見、推論、フィクションによって成り立っているが、「本質直観」とは、意識に現われ出てくる本質の与えられ方をそのまま観取することであって、憶見（ドクサ）を含んでいない。だから「本質直観の学」は「ありのままに」観取るだけである。⁵⁸その方法としての反省は、「志向性の本質の内に伏在し無数の形態で育成してくる、諸段階にわたって連続的に反復する意識生の＜反省性＞に基づいている」という。

意識への反省は、意識生の反省の本質構造に由来するのである。⁵⁹このことから、川喜田がいう「データの語りかけに最も自然に従ってまとめる」ことが「本質観取」に沿った営みであるといえよう。

だが、人間存在の実存的諸相、不安、死、日常、欲望等の概念を問う場合、コトバそのものがある価値の値を含んでいる。そこでハイデガーは、基本的にはフッサールと全く同じ方法を取りながら、実存の現象学、即ち「存在論」は解釈学を含まざるを得ないとした。要するに、本質直観においては、意味の与えられ方を意識の働きの形式性、構造として捉えようとする。ところが困ったことに、情動の与えられ方は、それでは原理的に捉えられない。⁶⁰つまり、通常は現れない「隠蔽状態」にある「存在」を、問われるべき「現象」としたが、それ自体は現前せず、現象となり得ないので意味としてしか捉えられない。そこで、直観ではなく、現存在によって常に既に理解されている存在を、解釈によって明らかにしようとする解釈学を「現象」の学とした。⁶¹

ハイデガーの現象学はフッサールとは異なり、生と世界を客観化することなく、事実的な生の進行の内部において生の連関を「覚知」することにある。この連関が「有意義性」であって、両者は連続している。よって、我々から切り離された「世界」について、実在性の問いを立てること自体、客観化の結果であるとする。⁶²そこで彼は、本質直観の方法を巧みに欲望論的、実存論的な文脈に変奏しながら、事物と人間存在の本質契機をかつてない仕方に取り出した。⁶³

ところが、この関係の原理論に「本来性—非本来性」という二項区分を導入した。平均的日常が、本来性の可能性を奪っているから、これを捨て去れという。だが現象学の立場からは、その本質は、日常生活「それ自体の内から煮つめていくという形で取り出されるべき」である、と竹田は指摘する。⁶⁴ハイデガーでさえ、情動が絡むとはいえ、データ（現象）から構造を生成する手法から外れ、トップダウンの解釈に陥ったといえよう。

(2) 「本質観取」の実例

本来的な現象学的批判の遂行には、自らが無自覚のうちに有している「観点」の自覚が不可欠である、とハイデガーはいう。それら先入見を排除するための思索における考察の手續きについて、メルロー＝ポンティは、本来の現象学的反省は、世界がその沈黙において語ろうとしていることを世界に語らせるものでなければならないとして、⁶⁵考察の対象を「取り上げなおし、わがものにし、内面化し、内在化しようとする反省の努力」であると述べた。⁶⁶

下記ハイデガーの作業は、「本質直観」の見事な見本、と竹田はいう。例えば、実存の本質を探究する場合、まず自分自身の生の最も基底になっている契機が何であるかと内省する。すると、思考、判断、信仰、愛、行動、意志、希求、自意識等様々なものが浮かぶ。これらを更に追いつめるために、相互の「可能関係」や「前提関係」を確かめ、最後に「気分」が生成された。「愛すること」や「自由」、「判断すること」は、それによって可能になる。この情状性（気分）を、ニーチェは「力」と呼んだ。⁶⁷要するに、「実存の本質」という課題を問う場合、データとして「思考」「判断」「信仰」「愛」「行動」その他様々なものが生成され、最終的本質として「気分」が洞察され構造化された。

また次は、「死」についての「本質直観」の見事な実例の一つであるという。キリスト

教では、信仰により永遠の生命が与えられる。仏教では輪廻転生し、解脱が最終目的になるなど様々である。⁶⁸そこで、死についての様々な説明から、物語の要素を取り払い、それを支えているモチーフの本質だけを取り出す。すると、死は各人にとって固有の、避けがたい、恐ろしい可能性だから、その意義を隠蔽し馴致せざるを得ない。そして「死への不安」は、世事の様々な気散じ事の中に人々を「頹落」させる。結局、自分固有の実存からの「自己了解」ではなく、「世界（世間）の方」から自分の存在を了解する理由は、「死の不安」の隠蔽と馴致ということにあった。⁶⁹

この本質観取の方法は、死を支えている本質（構造）だけを取り出し、死に関する様々なデータを得る。そこから死の「意義を隠蔽し馴致せざるを得ない」状況、更に「頹落」→「死への不安」の隠蔽・馴致へと本質を掘り下げ構造化している。しかしここから、前述したように、「非本来的なもの」という観点を「外側から持ち込み、死と向き合う自覚的な態度、即ち「先駆」等の「本来的」必要性を彼は説くに至った。⁷⁰

(3) 「志」を核とした「グループ編成」の方法

質的データの記述につき、川喜田は次の点を重視した。「ラベルづくりの最も肝要な心がけは、各一枚のラベルが、ひとつの『志』を持つように書け、〈中略〉アピールするという、能動的で訴えの方向性のある形容にしたいことがある。そこで、『こころ+指す』すなわち『こころざし』という言葉が生まれた」。したがって、全体として訴えかける一つの中心性をもつことがそのルールである。⁷¹

KJ法における本質把握は、「ラベル拵げ→ラベル集め→表札づくり」という一巡工程を「グループ編成」と呼び、これを累積する。「ラベル集め」は、元ラベルの志に耳を傾け、その訴えを直観によりよく聴き取りながら読み進む。理屈ではなく感性で受け止めつつ、三回目を読み終える頃になると、「このラベルとあのラベルとは、志が非常に近い。お互いに似ている。少なくとも、他のどのラベルとよりも、このふたつのラベルは同類の志を持っている」と感ぜられるラベル同士が目についてくる。それらをグループにする。⁷²

次の「表札づくり」では、その同志の核を直観で観取し、それと「殺し文句」を数枚の紙片にメモする。次いでそれらを空間配置し、内容構造を把握してから文脈を構成し、必要なこと全て盛り込んで一文にする。それら「志」の意を尽くしているかを点検し、意味を変えずに圧縮する。⁷³このようにして意味本質が表札に現わされるが、それは一グループのデータ内容の「単なる足し算ではないのはもちろんのこと、それらの最小公倍数でもなければ最大公約数でもない。また表札が的確でないと、同志の氣勢はあがらず、同志的結束はそれだけ妨げられる。的確な表札はまた、どのラベルの志をも全面的に吸収しえ、しかもそれを乗り越え、かつ高めるものなのである。」⁷⁴更に、志（構造）の類似の均等な近似性を類推と論理的思考等により上位概念へと抽象化し、その本質（構造）を掘り下げていく作業を、最終の表札の「志」同志の近さが均等になるまで続け、最後は関係思考によって「相関関係の配置図」構造を生成する。⁷⁵

(4) 小論「研究 I」のサンプルを用いた実例

2015年度4班のKJ法図解制作プロセスを分析すると下記のようなになる。⁷⁶

そのKJ法図解は、最終的に3つの島（最終的な表札のまとまり）になった。

島A最終表札の一行見出し：ちっとまって！考えてから!!（メディアリテラシーを身につけよう）

島B最終の表札一行見出し：流れる情報（止められない）

島C最終の表札一行見出し：いつでも どこでも だれとでも

そこで、島A最終表札の内訳をその生成の順序に従って次に分析評価する。

- No. 1 テレビのコマーシャルから、新しい製品の情報などを知ることができます。
- No. 5 テレビのコマーシャルを見ていると、商品の名前を覚えることがある。
- No. 6 お店で買うとき、コマーシャルで知っている品物を選ぶことがある。
- No. 7 広告を見て、とても安く売っているものを買いに行ったのに、かえって高い買物をしてしまった。

この4枚の元ラベル（データ）から、表札「コマーシャルは新しい商品の情報を覚えさせ、選ばせ、買わせる方向に消費者を誘導するので高い買物をすることがある」が生成された。この表札では「買わせる方向に消費者を誘導する」をそれら「志」の核として統合している。

また、もう一つの組み合わせとして、下記3枚の元ラベルがグループ化された。

- No. 4 情報を利用するときには、その情報の発信元や内容を見分け、わたした自身も冷静に判断することが大切です。
- No.13 情報を発信するときは、その流した情報によって、きずつく人がいないようによく考える。
- No.14 必要な情報を自分で選び出し、活用できるように、メディアリテラシーを身につける必要がある。

これらの「志」を統合したのが、表札「情報を利用するときには、その情報の信憑性を自分で考え、判断し、活用できるメディアリテラシーを身に付けることが大切である」となった。この表札は「メディアリテラシーを身に付ける」を「志」の核として統合しているが、No.13の「情報を発信するときは」という項目が脱落している。

上記2つの表札を統合した表札が下記であった。

島A最終表札：情報を利用するときは、その情報の信憑性を自分で考え、判断し、信用できるメディアリテラシーを身に付けることが大切である。

この最終表札は、「メディアリテラシーを身に付ける」を「志」の核（本質）として統合、明示したが、「買わせる方向に消費者を誘導する」を「志」の核として統合したもう一つの表札の内容が完全に脱落した。その理由は、これら4枚の元ラベルの「志」の近さが遠かったことであろう。それらは、むしろ島B最終表札：流れる情報（止められない）に近い。

以上のように、データの志（構造）の近さの均等性を中心に、志を次々と上位概念へとカテゴリー化（構造化）し、その本質を掘り下げる作業を繰り返すことにより、それらデータの本質構造が生成された。⁷⁷

(5)「その者自身をその者自身から見せる」ようにすること

前述したように、ハイデガーは現象学を語源的に分析し、「自己を示現する者をば〈中略〉その者自身から見せる」ようにするものだとした。KJ法も、同様の目標をもつ方法論

であることが次の記述からも理解できよう。

「特に最も苦心を要する表札づくりの本質とは何であるか。それを今日までの科学用語で説明することは、まだ不可能であると思われる。〈中略〉ただ『データをして語らしめる』という一見文学的で、科学的とは受けとられにくい文章の形容のみが、最も本質を衝いているように思う。しかしこれとても、むしろKJ法の一ラウンド全体を形容するにふさわしいだろう⁷⁸と川喜田は述べ、「自意識を離れ、精神統一をはかってデータに集中し、字義通り一字一句聴く」。ここから出発して、データ群に息吹を吹き込み、場に埋め込められた「意味の生態系の世界を生み出す」のが取材活動である。⁷⁹それは対象の側に立ち、我々がデータの意味に成りきることによって成立する。データ群間に自ずと論理が発生してくるのを待つ型の論理の創造である。自己の論理の投影ではなく、創作でもない。「データ群が内在させている論理を顕在化させる発見の行為である」。⁸⁰

逆に、「意志することは考えまいとすること」だ、とハイデガーは指摘する。つまり、人は意志するとき、絶対的始まりであろうとし、思考を放棄する。過去との関係を全て無視する。⁸¹主語がその過程の内にある「中動態」が残存していた古代ギリシャ世界には、意思というものはなかった。その後西洋世界で、意思や責任、主体という概念とともに、能動態と受動態が創られたのである。⁸²

意志や理念等により「不的確なグループ編成を何段階か積み重ねる」と、実態から浮いた「観念的」なものとなり、実態把握は崩壊する。これに対して「的確なグループ編成を積み重ねると、ますます物事の核心に喰いこんでゆく。こういうのを抽象化と呼びたい」。⁸³このように、KJ法のボトムアップの手続きの中で、本来の抽象化により表札（構造）が生成される。この現実の「核心に喰いこんでゆく」力は、「本質直観」の方法に似て、データの志の類似性の底を掘り下げ、各エビデンスの本質構造に迫るものとなる。

直観により志の近さを計るのが難しいのは、「超越」の不確定さと暗黙知に大きく関係していよう。自分の経験する事物が、果して本物であるかどうか。理性はこれをどこまでも疑う権利をもつ。言い換えると、「超越」として構成された事象経験は、原理的に、絶対的かつ最終的な確定を与えられないことを意味する。⁸⁴「構成された」とは、世界（事象）が意識のうちに構成される、つまり意識の自由を超え、それが自ずと自らを構成するという意味であるが、元ラベルや表札づくりの際、即ち「本質観取」には、そのクオリアを削除（省略）、歪曲（バイアス）、一般化（体制化）する過程が否応なく入り込むからである。このことに留意しつつ「データをして語らしめる」ことは、KJ法が原理的に「内在」における原的な「明証性」を重視していることを示唆している。

竹田の考えでは、フッサール現象学の難点は、「知覚直観」を「原的なもの」とした点であって、それはむしろ「情動的所与」である。「像的直観」(知覚、想起、想像)、「対象意味」(ノエマ)及びそれが等根源的な知覚体験の基本契機をなす。更に、関係状況の認識におけるそれは、その状況の意味の了解的所与及び情動所与であるという。⁸⁵一方、「元ラベル」づくりにおいては、現象の混沌は、対象化された一片のデータとして扱われる。他方、そのとき初めてデータと対面する「自分」が発生する。自他の区別は、必要に応じて生まれた方便だ。つまり、渾沌の状態につき放して「外からの眼」で視られるものとした上で、対象が訴える「内面の論理」に従って、素直に一つの宇宙として生み落す。このような外と内との一体融合化は、自己と環境との一体化だといってもよい。「無我」と呼んでもよい

ような状態のときこそ、最も主体性を発揮する。即ち、自分（主体）が状況とか環境の中に完全に融けこんでいるときこそ、実は最も状況の主人公のときである。⁸⁶

三木は「技術は人間の内在的・超越的本質に基づいている。我々の行為は主観的に規定されると共に環境的に規定され、〈中略〉環境形成的であると共に自己形成的である」といったが、⁸⁷技術のはたらきとともに、その成立条件そのものが中動態である。⁸⁸KJ法の技術は、エビデンスに基づいて意味本質を直観し、論理をもって「超越」(構造)を生成することにより、生の実体から現象の明証性を捉えることを可能にしているといえよう。

おわりに

科学成立の条件として、現実性を担保した上で、現象間の構造を把握し整合的に記述することが根本的に重要である。小論では、質的研究としてのKJ法における科学性について、特に現象の「明証性」を担保するための方法論を中心に、現象学と対比して検討した。現象との整合性（エビデンス）を備えたボトムアップの検証システムとして、現象学とKJ法の科学的思想及び方法論の類似性はある程度明らかになったと考えるが、両者の技術に暗黙知が伴うため、その記述には限界があった。

フッサールは、現象学的還元によって、事実そのものではなく、形相の意味本質を捉える「本質直観の学」は、意識に与えられた事象を「ありのままに」観て取り記述するだけであるとした。またハイデガーは、現象学を語源的に問い、「気遣い」の「意味を問う」はたらきにより、「自己を示現する者をば、その者がその者自身の方から自己を示現するとおりに、その者自身から見せる」ようにする学とした。

KJ法においては、「データ群が内在させている論理を顕在化させる発見の行為である」として、「本質追求をも含めた広い意味の状況把握で最も大切なことは、「おのれを空しくして、データの語りかけに最も自然に従ってまとめる」ことである。

物事の本質に関する納得の可能性は、言葉が相互確信の契機を含んでおり、その根源に「生世界」の「欲望—関心相関」構図（スキーマ）による意味（価値）理解構造があるからである。「本質」と「感性的な知覚」とが、構造としては同一だとする現象学の考え方は、言葉による人間の相互了解の可能性の根拠と、その限界を明示している。しかし「内在」は、コトバとともに織り上げている実感的な生の意識（クオリア）だから、一方で他人との相互的な確認の契機を含む。同時に、人が世界に対して抱くエロス価値は千差万別であり、そこから現れる「超越」も決して最終的に完全な「一致」に達し得ない。あえて一致させるには、一定の公理を必要とする。例えば自然科学の公理は、自然を人間のために最も効率的に利用できるように秩序として体系化する、という要請である。科学が記述する仮説（超越）の正しさは、この公理によってのみ確かめられるのであり、決して事物の客観秩序によって確かめられる訳ではない。⁸⁹したがって、自己（内在と超越）との対話を生成する孤独の重要性はここにあるといえよう。

方法論として、現象学においては、本質直観における明証性を内在知覚に求め、KJ法では「表札づくり」における「データをして語らしめる」という志の原則により、その明証性を担保していることを論証した。メルロー＝ポンティは、現象学における考察手続きについて、対象を「取り上げなおし、わがものにし、内面化し、内在化しようとする反省の

努力」であるとした。一方「ラベル集め」は、各ラベルの志を、理屈ではなく感性で受け止め、「同類の志を持っている」と感ぜられるもの同士をグループ化する。「表札づくり」では、その同志の核を直観し、それら志の意を尽くす文脈として一文にする。「志」と命銘し、それを追求するのは、生が現象の意味（価値）を問うこと（意見了解構造）であり、「欲望—関心—関与」構図に基づいているからであるといえよう。

「志」同志を統合することは、構造と構造の本質構造を掘り下げる科学的方法である。つまり、Aの後でBの生起が繰り返し見られたとき、Aが原因、Bが結果とすると、実際は場所も時も違うが、それらを同じと考えるのは、何らかの同一性をコード（記号変換）するからだ。それら原因→結果関係は、現象（原因）と、現象（結果）から引き出した同一性（コトバ）の関係形式（構造）にほかならない。⁹⁰

コトバは一回起生の現象のみならず、必ず複数の現象をコード（規則的体系化）する。したがって、構造も複数の現象をコードする。この中には未来の現象も含まれるので、構造は未来の現象を予測可能にする。構造が記述できれば、それがコードする現象を作り出すことは原理的に可能なので、予測可能性も再現性も保証される。しかし、最終的に正しい究極の理論はない。より多くの現象を説明できる理論（構造）が、より有効なものといえるだけである。理論は頭の中にあるのであって、外部世界にあるのではない。⁹¹

KJ法と現象学は、生のよりよい実践を目指し、より信憑性のある科学的妥当性を探究するための技術をもつ以上、⁹² 暗黙知が内在するのは当然である。したがって、「本質観取」の方法や「表札づくり」の技法について、小論で試みた以上の明示的記述は困難であった。よさを生み出す技術と鑑識眼は、実践によってのみ把握できるからである。

【註】

- 1 秋田喜代美・藤江康彦（編）2007 はじめての質的研究法 教育・学習編 東京図書 p.9
- 2 川喜田二郎 1986 KJ法—混沌をして語らしめる（川喜田二郎著作集第5巻）中央公論社 p.475
- 3 川喜田二郎 1995 発想法の科学 川喜田二郎著作集第四巻あとがき 川喜田喜美子・高山龍三 川喜田二郎 2010 川喜田二郎の仕事と自画像—野外科学・KJ法・移動大学 ミネルヴァ書房 pp.5-6
- 4 竹田青嗣 1989 現象学入門 NHK出版 p.229
- 5 竹田青嗣 2017 ハイデガー入門 講談社学術文庫（講談社選書メチエ 1995）p.111
- 6 池田清彦 1990 構造主義科学論の冒険 毎日新聞社（講談社現代新書1998）p.114
- 7 竹田青嗣 2017 欲望論—第1巻「意味」の原理論 講談社 p.114568-71
同前書 p.78, 110
- 8 川喜田二郎 1986 前掲 p.152-3
- 9 同前書 p.476
- 10 山浦晴男 2008 科学的な質的研究のための質的統合法（KJ法）と考察法の理論と技術 看護研究 巻号一覧 41巻 1号 pp.11-32
山浦晴男 2012 質的統合法入門—考え方と手順 医学書院
住政二郎 2010 質的研究の科学性に関する一考察 より良い外国語教育研究のための方法 外国語教育メディア学会関西支部メソロジー研究部会2010年度報告論集 pp.30-44
舟島なをみ・杉森みどり 1997 看護教育学における質的帰納的研究方法論開発研究のための理論的枠組みの構築 千葉看護学会誌 vol. 3 No.1. pp.8-14
田中博見 2010 KJ法入門：質的データ分析法としてKJ法を行う前に 外国語教育メディア学会関西支部メソロジー研究部会2010年度報告論集 pp.17-29
田中博見 2011 質的研究のための評価基準：KJ法を用いた動機づけ研究での例 外国語教育メディア学会関西支部メソロジー研究部会2011年度報告論集 pp.106-120
拙著 2017 教育学—人間科学からの展望 明星大学出版部 第10章

- 11 拙論 2012 KJ法学習による思考深化に関する研究—大学初年次教育への導入に関連して 明星大学明星教育センター紀要 第2号 pp.39-63
拙論 2017 質的研究のためのKJ法の科学性に関する研究Ⅰ 明星大学研究紀要・教育学部 第7号 pp.15-36
拙論 2017 質的研究のためのKJ法の科学性に関する研究Ⅱ—結論構造の信憑性とその生成過程を中心に 明星大学大学院教育学研究科年報 第2号 pp.1-20
- 12 竹田青嗣 2012 フッサール『現象学の理念』 講談社選書メチエ p.244
- 13 竹田青嗣 1989 前掲 p.124
- 14 同前書 p.122
- 15 同前書 p.123
- 16 同前書 pp.123-4
- 17 佐藤駿 2015 フッサールにおける超越論的現象学と世界経験の哲学—『論理学研究』から『イデー』まで 東北大学出版会 pp.227-8 (『純粹現象学および現象学的哲学のための諸構想』シューマン版=『イデー』 p.314)
- 18 川喜田二郎 1986 前掲 pp.476-7
- 19 竹田青嗣 1989 前掲 p.186
- 20 川喜田二郎 1986 前掲 p.550
- 21 竹田青嗣 1989 前掲 p.32
- 22 竹田青嗣 2017 前掲 欲望論—第1巻「意味」の原理論 p.204
- 23 池田清彦 1990 前掲 p.91
- 24 竹田青嗣 1989 前掲 p.44
木田元他編 1994 現象学事典「超越/内在」の項 フッサール現象学の根本テーゼは、「超越」の謎を解くために、「内在」の領野に還帰せよ、とある。
- 25 竹田青嗣 1989 前掲 pp.90-1
- 26 同前書 p.100
- 27 同前書 p.203
- 28 同前書 p.204
- 29 川喜田二郎 1986 前掲 p.474
- 30 同前書 p.33
- 31 同前書 p.472
- 32 同前書 p.467
- 33 竹田青嗣 1989 前掲 p.58 (『イデーⅠ』「二節、事実と本質の不可分離性」)
- 34 同前書 p.59, 92
木田元他編 前掲「本質」の項
- 35 佐藤駿 2015 前掲 p.230 (『フッサール全集』(Husserliana) 3巻 p.316)
- 36 竹田青嗣 1989 前掲 pp.67-8, 70-2
- 37 池田清彦 1990 前掲 pp.180-1
- 38 竹田青嗣 1989 前掲 p.132
- 39 木田元他編 前掲「実存主義」の項
- 40 池田清彦 1990 前掲 p.92, 98
- 41 川喜田二郎 1986 前掲 p.478
- 42 竹田青嗣 1989 前掲 pp.65-6
- 43 竹田青嗣 2017 欲望論—第2巻「価値」の原理論 講談社 p.97
- 44 同前書 p.73-4
- 45 竹田青嗣 2017 前掲 欲望論—第1巻「意味」の原理論 p.220
- 46 同前書 p.680-1
- 47 川喜田二郎 1986 前掲 p.458
- 48 川喜田二郎 1986 前掲 p.70
- 49 竹田青嗣 2017 前掲 欲望論—第1巻「意味」の原理論 p.609
- 50 竹田青嗣 1989 前掲 p.96, 158
- 51 新田義弘 1978 現象学 岩波書店 (2012 講談社 p.295)
- 52 竹田青嗣 2017 前掲 欲望論—第2巻「価値」の原理論 p.200

- 53 竹田青嗣 2012前掲 p.244
- 54 M・ハイデガー (松尾啓吉訳) 1960 存在と時間 勁草書房 上pp.50-62
古代ギリシャ以前に用いられた中動態は、主語が動詞の指し示す過程の内側に位置するのに対して能動態は、その外側に位置する。その後成立した能動態と受動態の関係は、意思の概念を中心とするが、古代ギリシャ以前にはそれは存在しなかった。(國分功一郎 2017中動態の世界—意志と責任の考古学 医学書院 pp.96-7) なお、松尾訳では、「中働態」と表示している。
- 55 竹田青嗣 2017 前掲 p.146
- 56 川喜田二郎 1986 前掲 p.78
- 57 同前書 p.332
- 58 竹田青嗣 1989 前掲 p.229
- 59 新田義弘 前掲 p.206
- 60 竹田青嗣 1989 前掲 p.230
M・ハイデガー (松尾啓吉訳) 1960 前掲 pp.66-7
- 61 ジャン・グレーシュ著 (杉村靖彦他訳) 2007『存在と時間』講義—統合的解釈の試み 法政大学出版局 p.122
- 62 加藤恵介 2012 ハイデガーのフッサール批判 神戸山手大学紀要第14号 p.30
- 63 竹田青嗣 2017 前掲 p.112
- 64 同前書 p.113
- 65 新田義弘 前掲 p.232
- 66 坂本拓弥 思考方法としての現象学 (批判): ハイデガーとメルロ=ポンティに導かれて 明星大学研究紀要・教育学部 第7号 p.83 (メルロ=ポンティ, M (木田元、滝浦静雄共訳) 2001 哲学者とその影 みすず書房 p.152)
- 67 竹田青嗣 2017 前掲 p.92-3
- 68 同前書 p.127
- 69 同前書 pp.128-130
- 70 同前書 p.131
- 71 川喜田二郎 1986 前掲 p.124
- 72 同前書 p.126
- 73 同前書 pp.151-2
- 74 同前書 p.147
- 75 KJ法の手続きの詳細については、「表札づくり」における「核融合」法等 拙論 前掲「研究Ⅰ・Ⅱ」を参照。
- 76 このKJ法図解(註記末【資料】)は、2015年度4班によって生成され、拙論「研究Ⅰ」における検証に用いた。KJ法の結論である「相関関係の配置図」構造についての下記仮説に基づき、KJ法習得希望者を対象とする演習(2015及び16年度明星大学免許更新講習)受講者90人全員を6人ずつ15班に分け、グループKJ法により作成された複数の図解を構造構成主義に則って解析し、それらの構造の近似性から信憑性を考察することにより、質的研究法としてのKJ法の科学性を論証した際のサンプルの一つである。仮説:14項目の質的データ(『新しい社会5年下』小単元課題「わたしたちは、どのようにすれば情報をじょうずに生かすことができるでしょうか」に関わるセンテンスを抜粋した要点文—青ラベル)に基づき、KJ法の原則に則って生成された結論「相関関係の配置図」構造と、対象者が同一の質的データに基づき作成した複数のそれとを比較し、近似的妥当性を確認することによりそれらの構造の信憑性を確保できる。
- 77 紙幅の都合上、他のサンプル分析評価は割愛する。他のグループ編成等のそれは、拙論の前掲「研究Ⅰ・Ⅱ」を参照。
- 78 川喜田二郎 1986 前掲 p.146
- 79 同前書 p.333
- 80 同前書 p.334
- 81 國分功一郎 2017中動態の世界—意志と責任の考古学 医学書院 p.206 (『思惟とは何の謂いか』 p.171)
- 82 同前書 p.97, 103
- 83 川喜田二郎 1986 前掲 pp.153-4
- 84 竹田青嗣 1989 前掲 p.94

- 85 同前書 p.137
 竹田青嗣 2017 前掲 欲望論—第1巻「意味」の原理論 pp.345-6
- 86 川喜田二郎 1986 前掲 pp.460-1
- 87 三木清 1941 技術哲学（三木清全集 第7巻 岩波書店 1969所収）pp.210-1
- 88 森田亜紀 2013 芸術の中動態—受容/制作の基層 萌書房 pp.115-6
- 89 池田清彦 1990 前掲 pp.182-3
- 90 池田清彦 1990 前掲 p.111
- 91 同前書 pp.112-3.この科学論を、池田は「構造主義科学論」と名付けた。
- 92 なお、科学的探究ではなく、技法としてKJ法を使う場合、元ラベルの統合は、必ずしも現実の明証性に基つて行う必要はない。元ラベルの志に即して統合するのだから、その結論構造は、設定した問題と姿勢、生に対する関心及び元ラベルの内容次第である。想像力と生の豊かさを求め、例えば物語や漫画等の制作にも活用できよう。また、元ラベルそのものも、文字に限らず、数字やイラスト、写真等でも可能である。

【資料】2015年度4班のKJ法図解

